



楊廷宝の建築作品における地形対応型設計手法に関する研究

曲，藝

(Citation)

神戸大学大学院工学研究科紀要, 1:7-12

(Issue Date)

2009

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002716>



楊廷宝の建築作品における地形対応型設計手法に関する研究

曲 藝^{1*}

¹工学研究科建築学専攻

(受付:December 16, 2009 受理:January 21, 2010 公開:March 15, 2010)

キーワード： 楊廷宝、中国、建築家、地形、設計手法

本論文は、中国の代表的な近代建築家の一人—楊廷宝の建築作品における地形対応型設計手法に関する研究である。研究にあたり、楊廷宝の61件建築作品をピックアップし、図面資料により建設敷地の地形を読み取り、それを建物の配置方式、床形状、壁面形状、屋根形状と合わせて分析することにより、6種類の地形対応設計手法を導きだした。この6種類の地形対応設計手法により、楊廷宝には地形を尊重し、利用する考え方が読み取れる。

1. 緒 言

楊廷宝（1901年～1982年）は中国の代表的な近代建築家の一人である^{注1)}。楊廷宝は1901年10月2日中国の河南省南陽市の趙營村で生まれ、1921年に、ペンシルバニア大学に留学し、P・クレト（Paul Cret）^{注2)}のもとで、ボザール流設計手法を身につけた。1927年に帰国後^{注3)}、彼はボザール流の設計手法に拘らず、機能を満足しつつ、自然環境への溶け込みや中国传统建築の継承を意図した独特な手法を作り出した。1940年より42年間に及んで中央大学で教鞭を執り^{注4)}、中国建築教育の基礎を築いた建築教育者でもある。また、1957年と1961年には連続して国際建築士協会副主席に選出され^{注5)}、国際的な建築界においても著名な人物である。

楊廷宝は1927年から1982年にかけて100件以上の建築を設計している^{注6)}。これまで筆者は地域性の視点から、楊廷宝の履歴と当時の中国の建築事情に基づき、彼の各時期の代表的な作品を分析し、彼の建築思想の考察を行っている^{注7)}。そこでは、楊廷宝の設計手法に関して中国文化と地域環境に立脚しつつ、中国传统建築と西洋初期近代建築及びモダニズムを融合させる試みとして示したが、その具体的方法については論じていない。『楊廷宝建築設計作品集』における作品の解説文には、「既存地形を生かす」という言葉がよく見られる。この本は楊廷宝によるものではないが、作品の解説は筆者による彼へのインタビューに基づいている^{注8)}ことから、彼は建築設計にあたり地形要素に配慮し



写真1 楊廷宝

ていたと考えられる。また、楊廷宝は晩年に地形に関する本格的な論述を残している^{注9)}。つまり、地形は楊廷宝にとって重要な設計要素であるといえる。彼の建築作品における地形に対応する設計手法を分析することで、楊廷宝の建築設計思想を明らかにする重要な手掛かりを得ることができ、中国の地域主義的建築設計理論の研究の一助となると考える。そこで、本研究は楊廷宝の地形対応型設計手法を明らかにすることを目的とする。

これまで、日本はもとより、中国においても楊廷宝の設計手法に関する研究は少ない^{注10)}。一方、建築と地形に関する研究は寺内美紀子によるアプローチの視点からの研究^{注11)}や遠藤康一による傾斜地の住宅断面の構成に関する研究^{注12)}などがある。前者は地形との関連を表現した建築作品を研究対象とし、各設計者によるそれぞれの手法に共通する「地形化建築」の構成方法に注目している。後者は傾斜地に建つ住宅を研究対象としている。いずれも建築類型または地形類型を整理し、その条件に対応する建築作品の分析により、構成類型を明らかにするものである。本研究はこれらの複数の建築家の作品事例を整理する研究とは異なり、楊廷宝という一人の建築家のすべての建築作品を研究対象とし、異なる地形条件に対して、その設計手法を明らかにすることである。

研究対象については、楊廷宝の建築作品のうち、『楊廷宝建築設計作品集』、『楊廷宝建築論述と作品選集』、『楊廷宝建築設計作品選』により、分析に十分な資料を有する単体建築作品を計61件ピックアップし、分析対象とする（表1）。同時に、資料補完のため、筆者は2006年9月18日から9月25日まで、中国の南京と北京に行って、楊廷宝の作品調査及び関連人物へのインタビューを行っている^{注13)}。

第二章では配置図、断面図、立面図、平面図を参考し、敷地の地形を整理分析する。

第三章では、第二章で得た敷地の地形と、建物の配置形式、床形状、壁面形状、屋根形状との関係から楊廷宝の地形に対応する設計手法を分析する。

第四章では、第三章の分析結果に基づき、楊廷宝の地形対応型設計手法の整理を行う。

2. 建築敷地の地形の分析

平地、傾斜地など敷地の地形は与条件として、建築設計に大きく影響する。本章では、表1にある61件の建物において、建設前の敷地の地形に関して考察する。その際、建物の配置図、断面図、立面図、平面図に注目し、図面上にある地面レベルに関する情報を分析する。図1に示すように、まず配置図の等高線に注目する。配置図に建物周辺の等高線が表現されている場合、敷地にレベル差があると判断できるので、この建物の敷地を傾斜地（以下「傾斜地」）とする。配置図には等高線の表現がない場合は、断面図と立面図の室外地面レベルに注目し、「傾斜地」であるかどうかを判断した。そのうち、地面レベルの差が一層分以上ある場合、その敷地を「急傾斜地」とし（表2）、そうではない場合、「緩傾斜地」とする（注¹⁴⁾）（表2）。断面図または立面図でも判断できない場合、平面図の各出入り口から屋外につながる階段及び各出入り口間の室内階段の数量に注目し、「傾斜地」であるか「平地」であるかを判断した。

3. 建築要素の分析

前章で定義した3種類の地形に基づき、本章ではそれと対応する設計手法を建物の配置方式、床形状、壁面形状、屋根形状の四つの侧面から分析する。

3.1 建物の配置方式の分析

建物の配置方式は建物の平面上できるだけまとめている＜集中配置＞方式と、敷地全体を十分に利用し建物を水平に展開する＜分散配置＞方式の二種類に大きく分けられる。楊廷宝の建築作品では＜集中配置＞が多用されている（43/61件）

表1 分析対象リスト

NO	年代	作品名	NO	年代	作品名
1	1927	京奉鉄道瀋陽総駅	32	1939	嘉陵新村国際親睦社
2	1928	天津基泰ビル	33	1939	円廬
3	1928	天津中国銀行倉庫	34	1940	美豊銀行
4	1929	東北大学図書館	35	1941	農民銀行
5	1929	東北大学文法科教学棟	36	1944	重慶青年会映画館
6	1930	瀋陽同澤女子中学校	37	1946	南京下関駅増築工事
7	1930	清華大学生物館	38	1946	成賢小築（楊廷宝自邸）
8	1930	清華大学気象台	39	1946	南京児童福利施設
9	1930	清華大学図書館増築工事	40	1946	原国民党塩務総局オフィスビル
10	1930	清華大学学生寮一明斎	41	1946	基泰工程司オフィスビル増築工事
11	1930	北京交通銀行	42	1946	百歩坂住宅
12	1930	中山陵邵家坂新村協同組合	43	1946	南京国際親睦社増築工事
13	1931	南京中央スタジアム	44	1946	北極閣住宅
14	1931	南京バスケット場	45	1947	新生クラブ
15	1931	野球場	46	1947	南京招商局待合及びオフィスビル
16	1931	紫金山天文台	47	1947	祁家橋クラブ
17	1931	南京中央病院	48	1947	原国民党資源委員会オフィスビル
18	1931	原国民党政府外交部オフィスビル	49	1947	中央研究院社会科学研究所
19	1931	中央研究院地質研究所	50	1948	延暉館
20	1932	中山陵音楽台	51	1948	中央研究院化学研究所
21	1933	国立中央大学図書館増築工事	52	1948	原国民党中央通信社オフィスビル
22	1934	管理中英庚款オフィスビル	53	1948	南京結核病院ビル
23	1934	原国民党中央党史史料陳列館	54	1951	平和ホテル
24	1935	大華大劇場	55	1951	全国商業連合会オフィスビル
25	1936	金陵大学図書館	56	1952	王府井百貨店ビル
26	1936	国立中央大学付属歯科病院	57	1953	華東航空学院教室棟
27	1936	武夷路住宅	58	1953	南京大学東南棟
28	1936	中央研究院歴史言語研究所	59	1957	南京工学院動力棟
29	1937	寄梅堂	60	1957	南京工学院沙塘園食堂
30	1937	四川大学図書館	61	1972	南京民航空港
31	1938	四川大学理化棟			

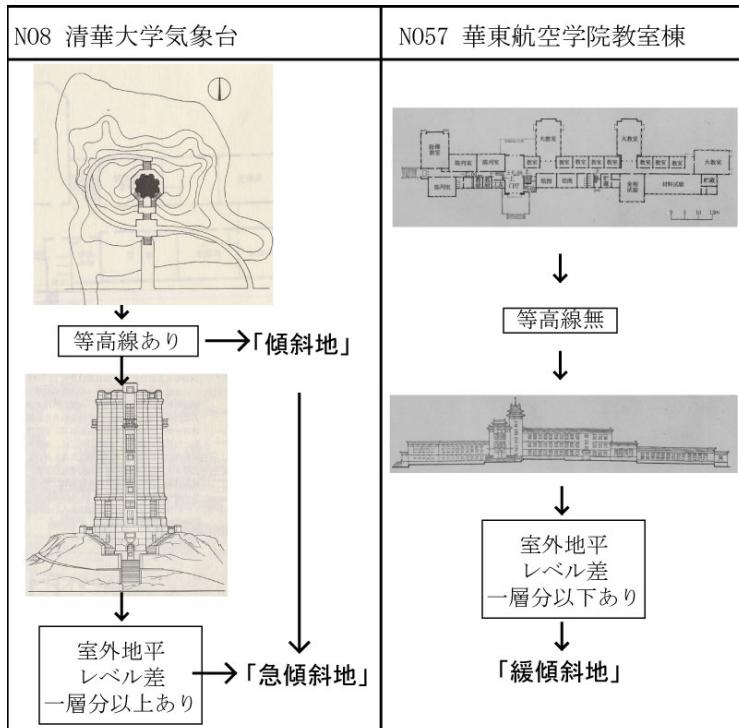


図1 分析例

ことが分かった。

敷地の地形から見ると、「平地」の場合、<集中配置>は半分強を示している(25/35件)。「緩傾斜地」において、<集中配置>が8件(8/14件)、<分散配置>が6件(6/14件)あり、その使い分けに差は見られない。「急傾斜地」では、<集中配置>は顕著に多く(10/12件)、敷地の勾配が急になればなるほど、まとまった床面積の確保が難しくなるため、<集中配置>が多用されたと考える。

3.2 床形状の分析

この節では、建物接地階の床形状に注目し、表4のように分析した。

床形状に関して、床全体がフラットである<床段差なし>と、地形の形状を配慮し、階段・スロープなど斜面形状を持つ接地性の高い<床段差あり>の二種類に分かれる。全体からみると、<床段差なし>の建物は圧倒的に多い(46/61件)。

敷地の地形からみると、「平地」の場合、全ての建物が床段差なしを採用している(35/35件)。

敷地が「緩傾斜地」の場合、<床段差なし>が大半を示している(11/14件)一方、<床段差あり>の建物も3件あり(3/14件)、地形を配慮する考え方方が見られる。そのうち、上階の床形状は、接地階の段状床と関係なく、フラットなものが2件ある(2/3件)。一方、上階の床形状は接地階の段状床に合わせて、段状なものも1件ある(1/3件)。

敷地が「急傾斜地」の場合、全ての建物は<床段差あり>であり、そのうち、スポーツ施設など上部屋根なしのものは5件あり(5/12件)、残った7件(7/12件)は一層分の高さを断面方向の単位とし、地形に沿った形に出しているが、吹き抜けなどの積極的な空間構成とはしていない。

3.3 壁面形状の分析

この節では、建物の壁面形状と地形の関係について、表5のように分析した。

壁面操作方法としては、床と垂直関係にあり、最も空間の使用に有利な<垂直式>、地形の形状を意識した<傾斜式>、機能と地形の形状を両方配慮した<段状式>の3種類の手法が想定できる。楊廷宝の建築作品には、<段状式>は一件もない。<傾斜式>は「急傾斜地」の場合に1件ある(1/61件)が、残りすべては<垂直式>である(60/61件)。これより、楊廷宝の建築設計では地形と関連する壁面操作がほとんど行われていないことが分かった。

3.4 屋根形状の分析

この節では屋根形状と地形の関係について分析した(表6)。分析にあたり、建物全体が

表2 地形の分類

平地	35	傾斜地	26
			一層分
「平地」		「緩傾斜地」	14
		「急傾斜地」	12

表3 配置形式の分析

	「平地」	35	「緩傾斜地」	14	「急傾斜地」	12
集中配置	長方形 [9]		長方形 [9]		多角形 [2] 共方形 [1] 円弧 [1] 円形 [1]	
	T形 [5]	25	T形 [3]	8	椭円 [2] 半円 [1] 八角形 [1]	10
	合院式 [6]	分散式 [4]	合院式 [1]	分散式 [5]	合院式 [1]	分散式 [2]
分散配置	18		6	10	6	2

表4 床形状の分析

	「平地」	35	「緩傾斜地」	14	「急傾斜地」	12
床段差なし	接地階	35	接地階	11	接地階	0
	12					
			上階 接地階 [2]		屋根なし 接地階 [5]	
床段差あり			上階 接地階 [1]	3		12
	10	0				
			上階 接地階 [1]	3		

表5 壁面形状の分析

	「平地」	35	「緩傾斜地」	14	「急傾斜地」	12
壁面操作	垂直				屋外 [E] 屋内	屋外 [E] 屋内
	60	35	14	11	11	11
段状	傾斜				屋外 [E] 屋内	屋外 [E] 屋内
	1	0	0	0	0	1
0	段状				屋外 [E] 屋内	屋外 [E] 屋内
		0	0	0	0	0

表6 屋根形状の分析

	「平地」	35	「緩傾斜地」	14	「急傾斜地」	12
陸屋根					陸屋根 [22]	陸屋根 [11]
	41	22	11	11	陸屋根 [4] 屋根なし [4]	8
20	方向性無				切妻 [3] 入母屋 [5] 寄棟 [5]	切妻 [1] 入母屋 [2] 寄棟 [0]
		13	3	3	切妻 [1] 入母屋 [2] 寄棟 [1]	4
20	方向性有				0	0
					0	0

表7 地形対応的設計手法の分析

NO	年代	作品名	地形	配置方式	床形状	壁面形状	屋根形状	地勢の対応手法類型		件数
								地勢の対応手法類型	地勢の対応手法類型	
1	1927	京奉鉄道瀋陽総駅	平	集	—	—	□			
2	1928	天津基泰ビル	平	集	—	—	□			
3	1928	天津中国銀行倉庫	平	集	—	—	□			
4	1929	東北大学図書館	平	集	—	—	□			
5	1929	東北大学文法科教学棟	平	集	—	—	□			
6	1930	瀋陽同澤女子中学校	平	集	—	—	□			
7	1930	清華大学生物館	平	集	—	—	□			
9	1930	清華大学図書館増築工事	平	集	—	—	□			
11	1930	北京交通銀行	平	集	—	—	□			
17	1931	南京中央病院	平	分	—	—	□			
18	1931	原国民党政府外交部オフィスビル	平	集	—	—	□			
21	1933	国立中央大学図書館増築工事	平	分	—	—	□			
23	1934	原国民党中央党史史料陳列館	平	集	—	—	□			
24	1935	大華大劇場	平	集	—	—	□			
28	1936	中央研究院歴史言語研究所	平	集	—	—	□			
29	1937	寄梅堂	平	集	—	—	□			
31	1938	四川大学理化棟	平	分	—	—	□			
34	1940	美豊銀行	平	集	—	—	□			
35	1941	農民銀行	平	集	—	—	□			
36	1944	重慶青年会映画館	平	分	—	—	□			
37	1946	南京下関駅増築工事	平	集	—	—	□			
38	1946	成賢小築（楊廷宝自邸）	平	集	—	—	□			
39	1946	南京児童福利施設	平	分	—	—	□			
40	1946	原国民党塩務總局オフィスビル	平	分	—	—	□			
41	1946	基泰工程司オフィスビル増築工事	平	集	—	—	□			
42	1946	百步坂住宅	平	集	—	—	□			
45	1947	新生クラブ	平	集	—	—	□			
46	1947	南京招商局待合及びオフィスビル	平	分	—	—	□			
47	1947	祁家橋クラブ	平	集	—	—	□			
48	1947	原国民党資源委員会オフィスビル	平	分	—	—	□			
52	1948	原国民党中央通信社オフィスビル	平	集	—	—	□			
54	1951	平和ホテル	平	分	—	—	□			
56	1952	王府井百貨店ビル	平	集	—	—	□			
59	1957	南京工学院動力棟	平	分	—	—	□			
60	1957	南京工学院沙塘園食堂	平	集	—	—	□			
10	1930	清華大学学生寮一明齋	緩	分	—	—	□			
12	1930	中山陵邵家坂新村協同組合	緩	分	—	—	□			
22	1934	管理中英庚款オフィスビル	緩	集	—	—	□			
26	1936	国立中央大学付属歯科病院	緩	集	—	—	□			
27	1936	武夷路住宅	緩	集	—	—	□			
30	1937	四川大学図書館	緩	集	—	—	□			
43	1946	南京國際親睦社増築工事	緩	分	—	—	□			
49	1947	中央研究院社会科学研究所	緩	集	—	—	□			
53	1948	南京結核病院ビル	緩	分	—	—	□			
55	1951	全国工商業連合会オフィスビル	緩	分	—	—	□			
61	1972	南京民航空港	緩	集	—	—	□			
50	1948	延暉館	緩	分	—	—	□			
51	1948	中央研究院化学研究所	緩	集	—	—	□			
57	1953	華東航空学院教室棟	緩	分	—	—	□			
13	1931	南京中央スタジアム	急	集	—	—	無			
14	1931	南京バスケット場	急	集	—	—	無			
15	1931	野球場	急	集	—	—	無			
20	1932	中山陵音楽台	急	集	—	—	無			
16	1931	紫金山天文台	急	集	—	—	無			
19	1931	中央研究院地質研究所	急	集	—	—	無			
25	1936	金陵大学図書館	急	集	—	—	無			
32	1939	嘉陵新村国際親睦社	急	分	—	—	無			
33	1939	円廬	急	集	—	—	無			
44	1946	北極閣住宅	急	集	—	—	無			
58	1953	南京大学東南棟	急	分	—	—	無			
8	1930	清華大学気象台	急	集	—	—	無			

凡例 | 平地 | 集中配置 | フラット | 段状床+段状床 | 垂直式 | 入母屋 | 寄棟 | 屋根なし
 緩傾斜地 | 分散配置 | 段床+フラット | 地中フラット+フラット | 傾斜式 | 切妻 | 陸屋根

複数のボリュームからなり、屋根の形状が2種類以上ある場合、主たるボリュームの屋根形状を分析対象とした。

屋根形状としては、大きく「陸屋根」と「傾斜屋根」の二種類に分けられる。そのうち、「陸屋根」は41件あり(41/61件)、多用されていることが分かった。「傾斜屋根」は20件ある(20/61件)。また、「傾斜屋根」には方向性を持つ片流れ屋根と招き屋根は見当たらず、全ては切妻、入母屋、寄棟のような方向性のないものである。

さらに、地形との関係からみると、「平地」、「緩傾斜地」、「急傾斜地」のいずれにおいても、陸屋根が多用されていることが分かった。

4 地形対応型設計手法の構成パターン分析

前章の建物の配置方式、床形状、壁面形状、屋根形状の分析結果に基づき、本章では地形要素との関係から、楊廷宝の建築作品における地形対応型設計手法の整理を行った。その結果、6種類の地形対応型設計手法の「型」に整理できた(表7)。

まず、大きく地形により、「平地」、「緩傾斜地」、「急傾斜地」の三種類に分類できる。次に、床形状により、「緩傾斜地」の場合、段差なし、段差ありの二種類に分類できる。接地階の上階床形状より、段差ありをさらに上階フラット床と段差床の二種類に分類できる。最後に、壁面形状により、「急傾斜地」の場合、「垂直方式」と「斜面方式」に分類できる。以上より、6つの型に分類できた。

平坦型は平坦な敷地を持ち、それに対応し、接地階の床形状もフラットにする設計手法である。

室外接地型は「緩傾斜地」に位置しているにも関わらず、接地階の床形状がフラットであり、敷地の勾配を屋外階段、スロープなど建築要素により、屋外空間で対応している設計手法である。

室内空間型は「緩傾斜地」に位置し、敷地の勾配を屋外だけではなく、積極的に屋内空間に取り入れる設計手法である。

地形順応型は「緩傾斜地」に位置し、敷地の勾配を屋内空間に取り入れるだけではなく、屋根形状でも地形を表現する設計手法である。

地形活用型は「急傾斜地」に位置し、地形の勾配を利用し、一層分を床レベル差として、空間を配する設計手法である。

特徴としては、一階の半分が土に埋め込んでいる。また、二つ以上の出入り口があり、それぞれ一階と二階にある。この設計手法は地形を利用しているが、屋内空間に取り入れていない。

地形強調型は「急傾斜地」に位置し、傾斜壁面を使って、地形と関係づける設計手法である。「急傾斜地」のため、床面積が限られているので、「集中配置」設計手法を採用し、床はフラットとしている。**地形強調型**の外観は塔状であるのが特徴である^{注15)}。

この六種類の設計手法から、楊廷宝の地形に対する考え方方が分かる。**室外接地型**の使用により、わずかな地形レベ

ル差でもそれを平地にしないことが分かり、彼の地形に対しての尊重が読み取れる。**室内空間型**の使用により、彼は地形を空間創造の要素として活用する考えが読み取れる。

地形順応型と**地形強調型**の適用には、屋根と壁面操作により、建物と地形とを関係づけさせ、地形を建築表現の要素として活用していることが分かった。

5. 結

本論文は、中国の代表的な近代建築家の一人—楊廷宝を取り上げ、彼の建築作品における地形対応型設計手法の分析を行った。

研究にあたり、楊廷宝の61件建築作品をピックアップし、図面資料により建物敷地の地形を読み取り、それを建物の配置方式、床形状、壁面形状、屋根形状と合わせて分析することにより、6種類の地形設計手法を導きだした。そのうち、**平坦型**は「平地」に合わせて、接地階の床をフラットな形をとる設計手法、**室外接地型**は「緩傾斜地」を屋外空間で対応する設計手法、**室内空間型**は「緩傾斜地」を屋内に取り入れる設計手法、**地形順応型**は敷地の勾配を屋内に取り入れ、方向性のない段状屋根で地形を表現する設計手法、**地形活用型**は「急傾斜地」を利用して建物を配置する設計手法、**地形強調型**は「急傾斜地」を建物の壁面で対応表現する設計手法である。この6種類の地形設計手法の使用より、楊廷宝には地形を尊重し、利用する考え方方が読み取れ、さらに、地形を屋内空間に取り入れ、外観表現の要素にも使っていることを抽出し、彼に対応する設計思想には地域性概念の萌芽があることを示した。

本論においては、楊廷宝の建築作品における地形要素の設計手法を明らかにしたが、気候、材料なども楊廷宝の地域性概念における重要な側面であると考えられ、今後の課題としてあげることができる。

[謝辞] 本研究は神奈川大学重村力教授、神戸大学山崎寿一准教授、浅井保助教より多くのご助言をいただきました。また、東南大学建築設計院楊徳安教授に貴重な資料を頂いた。記して深謝申し上げる。

参考文献

- 1) 南京工学院建築研究所編『楊廷宝建築設計作品集』中国建築工業出版社 1983
- 2) 楊廷宝(齊康記録)『楊廷寶談建築』中国建築工業出版社 1991
- 3) 『楊廷宝建築論述と作品選集』中国建築工業出版社 1997
- 4) 楊永生、劉叙杰『建築四傑』中国建築工業出版社 1998
- 5) 劉先覺『楊廷宝先生誕生百周年記念文集』中国建築工業出版社 2001
- 6) 『楊廷宝建築設計作品選』中国建築工業出版社 2001
- 7) 楊士萱(楊廷宝の息子)「温故知新—父楊廷宝誕生百周年のため」『建築学報』2002-3
- 8) 楊永生、劉叙杰、林洙『建築五宗師』百花文芸出版社 2005
- 9) 劉怡、黎志湧『中国当代傑出の建築家 建築教育家 楊廷宝』中国建築工業出版社 2006
- 10) 季秋、周琦『楊廷宝 20世紀 40年代小住宅設計探求』『中国近代建築研究と保護(五)』清華大学出版社 2006
- 11) 朱振通「基泰南京外交ホテル方案最初図の探求について」『華中建築』2005-05
- 12) 賴德霖「折衷背後の理念—楊廷宝建築的比例問題研究」『中國近代建築史研究』清華大学出版社 2007
- 13) 曲藝、重村力、山崎寿一、浅井保「楊廷宝の建築設計思想に関する研究—地域性概念に着目して—」日本建築学会近畿支部報告集 2007
- 14) 張軒、李明「建築家楊廷宝の経歴と建築活動—近代中国における建築家の活動に関する研究—」日本建築学会中国支部報告集 第30巻 pp. 59-64 2008.3
- 15) 寺内美紀子、坂本一成:「現代日本の建築作品における地形化表現による外形構成—領域的性格からみた外部空間の構成形式に関する研究(5)」日本建築学会計画系論文集 NO.559, pp. 131-136 2002.9
- 16) 遠藤康一、坂本一成、寺内美紀子:「傾斜地における住宅建築の断面構成—建築と周辺環境による空間構成に関する研究」日本建築学会計画系論文集 NO.561, pp. 145-150 2002.11

注

- 注1)『建築四傑』では中国近代の建築家の代表人物として梁思成・劉敦楨・童萬・楊廷宝の四人を挙げている。『建築五宗師』では、上述した四人以外、呂彦直を加えて中国の近代代表的な建築家としている。参考文献4)、5)を参照
- 注2)『アメリカ建築百科大辞典』ではPaul Cretを「パリ美術学院で勉強して、すべての設計思想はパリ美術学院の伝統からである。彼はボザールの方法に基づき、ボザールの設計を伝授し、そして同様な方法で作品を設計する。彼は革新者ではなく、全部の設計は決してその後の近代建築に属しない。しかし彼は數

多くの異なる様式の作品を設計し、今から見ても、すばらしい作品と考えられるべきである。」と評価している。参考文献9) pp16 筆者訳

注3)楊徳安のインタビューによれば、1927年楊廷宝帰国後、天津の基泰工程司に入社した。当時の基泰工程司の主な管理者は閔頌声、朱彬、楊寬林、楊廷宝四人であった。

注4)中央大学は南京に位置し、1949年10月南京大学と改めた。現在の校名は東南大学である。参考文献9) pp51を参照

注5)参考文献7)を参照

注6)朱振通は「基泰南京外交ホテル方案最初図の探求について」では楊廷宝生涯に渡って、112個プロジェクトを設計したと指摘している。参考文献7)を参照。筆者は参考文献1)を基に楊廷宝の作品数を集計した結果、ちょうど112件のプロジェクトであることが分かった。しかし参考文献1)では楊廷宝の初期作品少帥邸(張學良邸)が抜けている。したがって、楊廷宝の設計した作品の正確な数量が確定できないが、112個以上あるのが確かである。

注7)参考文献13)参照。

注8)参考文献1)の後書きを参照。

注9)参考文献2)参照。

注10)住宅の設計手法を論じた論文として参考文献10)、南京外交ホテルの設計案に対する研究として参考文献11)、プロポーションを論じた論文として参考文献12)がある。日本では筆者らの研究参考文献13)以外、楊廷宝の経歴に関する研究参考文献14)がある。

注11)参考文献15)参照。

注12)参考文献16)参照。

注13)2006年9月19日楊廷宝の旧居で、楊廷宝の娘である楊士英教授のインタビューを行った。2006年9月21日、東南大学建築設計研究所で、楊廷宝晩年の同僚楊徳安教授のインタビューを行った。楊徳安教授は参考文献1)の編纂主任でもあった。

注14)ここでは絶対寸法による分析ではなく、個々の建物と地形との対応をよく示す建物毎に設計された一層分の階高を分析の単位としている。

注15)地形強調型の地形の特徴としては急傾斜地であること。建物を塔状に設計することによって、その地形の勢いを生かして、建物がより高くそびえるように感じられる。また、建物自身も地形の延長のように見える。より一層一体感が感じられる。

図版出典

写真1 『楊廷宝建築論述と作品選集』